



「二式飛行艇と『K』作戦」

旧海軍は昭和 13 (1938) 年、飛行艇の試作を川西航空機株式会社に発注し、対米開戦時には、飛行実験をほぼ終えていました。開戦後の 17 年 2 月に制式化されたこの飛行艇が二式飛行艇（いわゆる二式大艇）です。海軍内ではすでにこの年 1 月から、ハワイへの再奇襲について予備研究が進められ、米側復旧作業の妨害、さらには米艦隊への決戦強要策として二式飛行艇の使用が検討されていました。この作戦が「K」作戦です（『戦史叢書 中部太平洋方面海軍作戦<1>昭和十七年五月まで』）。

上掲の史料は、二式飛行艇を擁していた第二十四航空戦隊の戦闘詳報です（登録番号：⑤戦闘詳報戦時日誌 132）。飛行艇の航続距離は 3,862 海里に及んでいたため、マーシャル諸島から出撃して途中で 1 度燃料補給を行えば、ハワイを攻撃することが可能でした。3 月 3 日、横浜航空隊配属の同飛行艇 2 機は、マーシャル諸島のウォッゼ（ウォツジェ）環礁を発し、4 日にはフレンチフリゲート礁において着水し、伊号第九潜水艦からの補給を受けました。2 機の飛行艇隊は離水の後、高度 4,200 メートルを航行し、オアフ島上空に達します。史料中、同日の記事として「二一〇真珠湾奇襲ニ成功セリ」が確認できます（上掲ほぼ中央）。指揮官機である一番機が爆撃を実施しましたが、二番機は爆撃せず、2 機は帰途につきました。大きな効果が期待されていた「K」作戦でしたが、結果として「ホノルル地区を震動せしめた（米側公表）」に留まりました。

米軍の哨戒状況等に鑑み、ハワイ空襲は、以後実施されませんでした。二式飛行艇に関する後日譚としては、19 年 3 月に聯合艦隊司令長官古賀峯一が殉職の際、同艇に搭乗していたことが知られています。